The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国立公園と国家アイデンティティー : イエロースストーン国立公園誕生を例に
Author(s)	田中, 俊徳
Citation	パブリック・ヒストリー. 2009, 6, p. 126-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66469
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public (2009) **6**, pp 126-136 ©2009 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
National Parks and National Identity: An Instance of the Birth of Yellowstone National Park
Toshinori Tanaka

研究動向

国立公園と国家アイデンティティー

イエローストーン国立公園誕生を例に

田中俊徳

はじめに

アメリカ国務省が発行している電子ジャーナル *ejournal USA* の 2008 年 6 月号は「国立公園、国家の遺産（National Parks, National Legacy）」だった。(1) 序章は、エドウィン・バーンバウム博士（Ph. D. Edwin Bernbaum）による「国立公園における精神的、文化的重要性」で始まる。彼は国立公園が「我が国家の価値観、理想、起源を祭る国家的ランドマーク」であり、「子どもたちに残すべき遺産」だと述べている。さらに国立公園は「アメリカの最良の概念（best idea）」であり、「地球全体の特別な場所を保護するモデルとして世界文化への貢献をしている」と指摘している。(2) 他の章では「国立公園は国を変えることができる」と題されたコスタリカの事例や、アメリカ内務省国立公園局長メアリー・ボーマー（Mary Bomer）による「国民を 1 つにする特別な場所」などが特集されている。このジャーナル 1 つをとっても、アメリカが国立公園に投影している国家アイデンティティーを指摘することができるだろう。

本稿では、アメリカが国立公園に国家アイデンティティーを投影するに至る最初の段階として、イエローストーン国立公園の誕生に関する議論を考察する。

1　ヨセミテ公園誕生に至る諸背景 ── 文化的コンプレックスを抱えるアメリカ

1776 年 7 月 4 日、大陸会議は独立宣言を採択した。1783 年、パリ条約において、イギリスはアメリカの独立を承認した。環境史の大家であるロデリック・ナッシュ（Roderick Nash）が *Wilderness and the American Mind* の中で述べるように「新たな自由を獲得したアメリカの最初の課題は、その正当性」であった。「アメリカ人は、気恥ずかしい田舎者から誇りと自信ある市民に変わる何か『独特なアメリカ性』を探し求めた…国の短い歴史、弱い伝統、二流の文芸はヨーロッパと比較することもできなかった…しかし、少なくとも 1 つの点において、アメリカ

(1) U.S. Department of State, *National Parks, National Legacy*. <URL= http://www.america.gov/media/pdf/ejs/0708.pdf#popup (2008/09/20)>.
(2) *Ibid.*, p. 5.

はヨーロッパに勝っていた。それが、自然である[(3)]」。もっとも、西部の発見に至るまで、明らかに「自然」だけでは十分ではなかったとナッシュは言う。独立初期の詩人、フィリップ・フレノー（Phillip Freneau）は 1780 年代にミシシッピ川を「小川（a small rivulet）でしかないナイル川や、水路（a ditch）でしかないドナウ川に比べると一級の河川（this prince of rivers）である」と形容している[(4)]。これは、独立初期の愛国心をアメリカの雄大な自然に託しているものであるが、ヨーロッパを凌駕するにはさらなる新世界独自の「自然」が発見されなければならなかった。

19 世紀のアメリカは膨張の歴史であった。1803 年のルイジアナ買収、45 年のテキサス併合、46 年の北西州（オレゴン）割譲、48 年のカリフォルニア併合、58 年のメキシコ北部買収、67 年のアラスカ買収、98 年のハワイ併合。1830 年代には、アメリカも産業革命を迎え、鉄道、電信などの発達と重化学工業化が生じた。大都市圏の出現もこの時期におこった。19 世紀中葉のアメリカは、後発ながら産業国の仲間入りを果たした。このように国家として拡大、成熟する反面、アメリカの思想、芸術はヨーロッパから見向きもされず、ヨーロッパに対する文化的コンプレックスは増大した。アメリカ美術史の第一人者とされる、バーバラ・ノヴァック（Barbara Novak）は「自然と文化」（*Nature and Culture*）の中で、19 世紀のアメリカが「文化の中心から外れている劣等感」を持ち、「地方であることに対する矛盾する感情と不安は開花しつつあった文化に対する誇りと楽観主義を揺さぶった」と述べている[(5)]。このアメリカが抱える文化的コンプレックスの解消に有効だったのが、1850 年代以降西部において発見された原生自然（wilderness）であった。この発見は、自然を評価するロマン主義の影響を受けた知識人を中心にアメリカを湧き立たせた。

とりわけ 1851、52 年に発見されたヨセミテ渓谷や巨木で知られるレッドウッドに対する反響は大きかった。カリフォルニア地学調査会（California Geological Survey）のウィリアム・ブラウアー（William Brewer）はヨセミテのブライダルフォール（Bridal Fall）を「スイスのどんな滝にも勝る…実際のところ、ヨーロッパ中のどのような滝よりも素晴らしい」と描写した[(6)]。リパブリカン紙（*The Republican*）編集者のサミュエル・ボウルズ（Samuel Bowles）は「ヨセミテ！…スイスすべてに匹敵する…いや、アルプスを見尽くしても見ることのできない荘厳さと美しさだ」と述べている[(7)]。レッドウッドの巨木に関しては、「シエラネバダのレッドウッドは、ヨーロッパ文明の繁栄どころか、キリスト教の誕生よりもずっと以前からある」、「ヨーロッパの過去の遺物と違い、レッドウッドは生ける文明だ」のようにヨーロッパを意識した文句の数々が展開された[(8)]。そして、「アメリカには、ヨーロッパの城も遺跡もどんな修道院だってかなわ

(3) Nash, Roderick, *Wilderness and the American Mind* (3rd Ed.), Yale University Press, 1982, p. 67（以下、Nash, *Wilderness* とする。）

(4) *Ibid.*, p.68

(5) バーバラ・ノヴァック『自然と文化 ── アメリカの風景と絵画 1825-1875』（黒沢眞理子訳 ）玉川大学出版部、2000 年、234 頁。

(6) Runte, Alfred, *National Parks: American Experience* ,University of Nebraska Press, 1979, p.20.

(7) *Ibid.*, p.20.

(8) *Ibid.*, p.22.

ない自然の芸術（earth monument）が存在している」と言われた。[9] ナッシュは「19 世紀中葉には、原生自然が国家のプライドに欠かせない文化的、精神的拠所として認識された」と述べている。[10]

このように西部の大自然がナショナリズム[11]を喚起する一方、西部諸地域の併合と 1848 年のカリフォルニアにおける金鉱発見は大規模な西漸運動を巻き起こした。この西漸運動は各地でインディアンとの衝突を引き起こすと同時に大規模な自然破壊も引き起こした。平野は耕され、森林は伐採された。インディアンの衣食に深く関わるバッファローの大量殺戮も行われた。東部においても、工業化に伴う都市化は急速であった。これら一連の大規模な自然破壊が、一方で生じ始めた原生自然の評価を刺激した。1832 年には画家として有名なジョージ・キャトリン（George Catlin）がインディアンや野生動物などを野生状態で保護する「国家公園（nation's park）」の必要性を訴えている。また、1840 年代末には、19 世紀アメリカを代表する画家トマス・コール（Thomas Cole）が失われてつつある原生自然の保護の必要性を訴えた。さらに、1850 年代には思想家として知られる、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー（Henry David Thoreau）も度々、月刊誌「アトランティック・マンスリー」（*The Atlantic Monthly*）などでありのままの自然の保護を訴えている。「原始的森林を含んだ 500 から 1000 エーカーの公園を作ろう…新世界（New World）を新しいまま（new）にしようじゃないか」という 1859 年のソローの論説をナッシュは「数十年におよぶアメリカナショナリズムの絶頂である」と評している。[12]

このように、ロマン主義やナショナリズムによる自然の評価を背景としながら、1864 年にヨセミテ公園が誕生する。ヨセミテ渓谷が連邦政府からカリフォルニア州政府に移譲され、「公共の利用、休息、レクリエーションのため」の公園となったのは南北戦争中の出来事であった。「ヨセミテ渓谷とマリポサ巨木群をカリフォルニア州に譲渡する法案」に署名したのは、エイブラハム・リンカーン（Abraham Lincoln）大統領である。[13] 10 平方マイルほどの小さな土地であったが、公有地を景観とレクリエーションのために保全したのは世界で最初の例であった。ナッシュの弟子にあたり、国立公園史家として知られるアルフレッド・ラント（Alfred Runte）は、「このヨセミテ法の成立は、環境主義ではなく、モニュメンタリズムこそが、原動力であった」と

---

(9) *Ibid.*, p.22.

(10) Nash, *Wilderness,* p.67.

(11)「ナショナリズム」概念については、アーネスト・ゲルナーの「政治的な単位と文化的あるいは民族的な単位を一致させようとする思想や運動」という定義がしばしば引用される。厳密にはナショナリズムは愛国心（郷土愛）と区別されるべき概念であるが、先行文献で区別や定義がされていないため、本稿でも厳密に区別せず、愛国心を含んだ広義の概念とする。cf. アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』（加藤節監訳）岩波書店 、2000 年、橋川文三『ナショナリズム ── その神話と論理』紀伊国屋書店、1968 年他。

(12) Nash, *Wilderness,* pp.102-103. ソローの発言をナショナリズムの絶頂とする理由についてナッシュは述べていない。

(13) 正式名称は An Act Authorizing a grant to the State of California of the "Yo-semite Valley" and of the land embracing the "Mariposa Big Tree Grove" 。
以下、法律の正式名称はいずれも Cameron, Jenks, *The National Park Service: its History, Activities and Organization,* D. Appleton, 1922, pp.93-99 による。

述べている。モニュメンタリズムとは歴史的建造物の代わりとなる大自然に国家アイデンティティーを見出し、これを保護することである。[14] すでに挙げたヨセミテに対する美辞麗句に代表されるように、モニュメンタリズムはヨーロッパに対する文化的コンプレックス解消の役割を果たしたとラントは指摘する。ヨセミテは「国立公園」という名称こそつかなかったが、その概念は国立公園の原型とも言われる。[15]

さて、このヨセミテ公園の成立が既述したようにヨーロッパを意識した強いナショナリズムを包含していたのに対し、イエローストーンはその成立背景に対する議論が錯綜している。イエローストーンを理想化するために用いられた「キャンプファイア」説（後に詳述）は、すでに否定されて長い。ラントは既述の文献においてヨセミテ同様のモニュメンタリズムを指摘するが、イエローストーンに関しては歯切れが悪い。最近では、リチャード・ウェスト・セラーズ（Richard West Sellars）が、鉄道という独占企業による経済的要因を挙げている。第 2 章では、イエローストーン誕生の経緯について述べたうえで、イエローストーンの誕生要因として提示されている論を検証する。

2　イエローストーンの成立とその背景

（1）イエローストーン誕生の経緯

イエローストーン地域の探検が開始されたのは比較的遅かった。19 世紀前半には毛皮の行商人や山師などがこの地域を通ったらしい記録も残っているが、初期における探検隊と呼べるのは 1859-60 年のブリゲイダー・レイノルズ（Brigadier Reynolds）と 1869 年のデイヴィッド・フォルサム（David Folsom）、チャールズ・クック（Charles Cook）程度である。[16] イエローストーンは標高が高く隔絶されており、また、インディアンによる襲撃がある地域だったためである。1870 年には、ヘンリー・ウォッシュバーン（Henry Washburn）とグスタフ・ドーン（Gustavus Doane）をリーダーとする 19 人編成の隊が同地域を探検した。インディアンの襲撃に備えるために陸軍のエスコートが必要であった。[17] この探検の中で、弁護士であるコーネリアス・ヘッジス（Cornelius Hedges）は、イエローストーンのような土地、つまり「地学、鉱物学、植物学、動物学、鳥類学などの分野において地球上もっとも素晴らしい自然の宝庫」[18] は国立公園として永久にすべての人のためにとって置かれるべきだ、と述べた。周囲も彼の意見に同意した。キャンプファイアを囲みながらのこの会話は、国立公園概念が現実的に萌芽した歴史的瞬間であると言われている。しかし、この内容を記した日記が出版されたのは 1905 年のことであり、

(14) Runte, *op.cit.*, p.29.
(15) 上岡克己『アメリカの国立公園 ── 自然保護運動と公園政策』築地書館 、2002 年、39 頁 など。
(16) Ise, John, *Our National Park Policy: A Critical History*, The Johns Hopkins Press, 1961, p.14.
(17) 一般にウォッシュバーン－ドーン隊と呼ばれる。ドーンはエスコートした陸軍の隊長である。ウォッシュバーン－ランフォード－ドーン隊と呼ばれることもある。
(18) *Ibid.*, p.15. 引用部分はドーンがイエローストーンについて語ったこと。

1871 年頃の国立公園制定運動においては「国立公園（National Park）」という用語は使用されていなかった、とリチャード・バートレット（Richard Bartlett）は述べている[19]。これは 1872 年当時の「イエローストーンを公園（a public park）に指定する法律」[20]などで一度もイエローストーンが National Park と記されていないことからも指摘できる。イエローストーンが法において初めて National Park と呼ばれるのは 1894 年の「イエローストーン国立公園内の鳥獣保護に関する法律」[21]である。1892 年にはヨセミテが「ヨセミテ国立公園内の通行を認める法律」[22]において National Park と記されているため、法律上はヨセミテの方が先に国立公園と呼ばれていたことになる。もっとも、ヨセミテの場合は、1864 年に指定されたカリフォルニア州立のヨセミテ公園と明確に差別化するために記されたとも考えられる。いずれにせよ、伝説化された「キャンプファイヤから生まれた国立公園」説は、その後も広く流布された。

さて、1870 年の探検から帰ったドーンによって書かれた報告書は新聞や雑誌への掲載によって耳目を集めた。また、隊員の 1 人でのちに「国立公園ランフォード」の異名をとるナタニエル・ピット・ランフォード（Nathaniel Pitt Langford）は講演会を度々実施した。この講演に関心を持ったのがペンシルヴェニア大学地理学教授のフェルディナンド・ヘイデン（Feridinand Hayden）であった。ヘイデンは政府の議会工作ののち 4 万ドルの調査費を得て探検隊を組織し、イエローストーン地域の調査を行った[23]。ヘイデンの探検はニューヨーク・タイムズ（New York Times）をはじめ東部の関心を集めた。これら探検の成功からヘイデンは「公共のための自然保護」を訴え、上下両院議員の説得にまわった。1871 年 12 月に下院での立法審議が開始され、1872 年 3 月にイエローストーン法がユリシーズ・グラント（Ulysses Grant）大統領によって署名された。

（2）イエローストーン国立公園誕生要因の議論

イエローストーン国立公園の成立要因を論じたものとして、ナッシュの前出である *Wilderness and the American Mind* と “The American Invention of National Parks”[24]（以下、“Invention”）がある。前者は、後にラントやセラーズが指摘する無価値性や鉄道会社による影響を指摘するにとどまり、概説的である。よって、ここでは取り上げない。後者は、表題の通り国立公園がいかに誕生したのかを 4 点に絞って指摘している。また、これを踏襲した上岡の著書[25]がある。次に、モニュ

---

(19)Bartlett, Richard A., *Nature's Yellowstone,* University of Arizona Press, 1974, pp.188-189. cf. 伊藤太一「イエローストーン国立公園の成立とその理想化」『造園雑誌』第 56 号（2）、224-242 頁。

(20) 正式名称 An Act To set aside a certain tract of land lying near the headwaters of the Yellowstone River as a public park。

(21) 正式名称 An Act To protect the birds and animals in Yellowstone National Park, and to Punish Crimes in Said Park and for Other Purposes。

(22) 正式名称 An Act Granting to the country of Mariposa, in the State of California, The Right of Way for a free Wagon Road or Turnpike Across Yosemite National Park, in Said State。

(23) 村串仁三郎「アメリカ国立公園の理念と政策についての歴史的考察（1）――自然保護と観光その他の開発との確執の理解をめぐって」『経済志林』第 69 号（2）、93-154 頁。

(24) Nash, Roderick, “The American Invention of National Parks,” *American Quarterly* Vol.22 (3), 1970, pp.726-735.

(25) 上岡、前掲書。

メンタリズムと「無価値性」を論じた前出のラント、さらに独占企業による経済的利害を論じたセラーズの *Preserving Nature in the National Parks*[26] が主に存在する。ナッシュの "Invention" から順に見てみたい。

まず始めにアメリカ独自の自然体験をナッシュは指摘する。とりわけ、原生自然をアメリカ性として重要視したと述べている。その原生自然が急速に失われる危機感が国立公園を生んだと言う。第 2 に、民主主義思想である。古くから自然との調和を求めた中国やインド、日本などで国立公園思想が生じなかったのは、民主主義の欠如と公有地概念の欠如があったと指摘する。第 3 に国立公園として保護するだけの自然が存在したことである。「もし北米への植民が 11 世紀から 15 世紀の間に行われていたら国立公園の誕生はありえなかっただろう」し、「植民活動が東部からだけではなく、西部からも行われていたら原生自然保護の概念が登場する前に文明が自然を一掃していただろう」と指摘している[27]。第 4 に、アメリカが国立公園を作るだけの余裕があったことである。広大な土地と経済的余裕が国立公園を可能にした。

このようにナッシュは国立公園の成立背景について 4 点を指摘するが、この 4 点は「国立公園誕生要因」と「国立公園発展要因」の混同があるように思われる。とりわけ、誕生要因に関してはイエローストーンと国立公園全般の誕生要因を明確に分けずに述べているため、一概にイエローストーン誕生要因として指摘はできない点に注意を要する。その上で、これら 4 点に対する解釈を述べる。

第 1 の点である「アメリカ独自の自然体験」は、極めて重要である。しかし、アメリカ性としての原生自然の評価が劇的に高まるのは、フロンティア終焉を迎える 1890 年前後であり、イエローストーンや 1864 年のヨセミテ公園設置の段階で、この指摘はあたらないだろう。ナッシュもイエローストーンに関して「その重要性に完全に気づく前に、国立公園を設置していた」[28]というようにイエローストーンを事後的に評価するきっかけではあるが、イエローストーン設立の直接的要因としてはあたらないはずだ。もっとも、前章で述べたようにナッシュは「19 世紀中葉には、原生自然が国家の自尊心に欠かせない文化的、精神的拠所として認識された」と指摘しており、一背景として原生自然評価があったことは確かである。しかし、アメリカ独自の自然体験やアメリカ性を引き合いにイエローストーン設置を述べる段階ではないと言える。

第 2 の点である「民主主義思想」は文脈による判断となる。ここで言う民主主義が何を対象としているのかを考える必要があるからだ。ナッシュは封建社会に対しての民主主義という用い方をしているため彼の指摘は正しいというべきだろう。封建社会にも王家や貴族の狩猟場などは存在したが、いずれも私有目的であり公共のために設置されたものではない。公共のために自然を保護しようという思想は民主主義でなければ生まれ得なかったとナッシュは言う。一方、この民主主義が社会主義に対して用いられていれば注意を要する。なぜなら社会主義国家

(26) Sellars, Richard, *West. Preserving Nature in the National Park* ,Yale University Press, 1997.
(27) Nash, "*Invention*", p.733.
(28) *Ibid.,* p.731.

は 1922 年のソビエト連邦誕生を待つ必要があり、国立公園誕生の時代背景として比較ができない。また、ソビエト連邦はいち早くザポヴェドニク制度（厳正自然保護区制度）など先進的な自然保護体制を敷き、第 2 次世界大戦後に東欧の社会主義諸国がこぞって国立公園制度を導入した経緯から見ても社会主義において国立公園制度が支持されないことはないからだ。

第 3、第 4 の点は、いずれも地理・歴史的要因から国立公園に足る自然が残されていたという大前提を述べたに過ぎない。上岡は『アメリカの国立公園』の中で、国立公園の誕生要因についてナッシュの論をそのまま踏襲している。さらに、インディアンが自然調和的な生活を送り自然を残していた点を指摘するが、これも大前提に過ぎない[29]。また、上岡はイエローストーン誕生要因として「南北戦争後の分裂を体験し…国家としての一体感を共有できるものを探していた」と述べるがこれは論拠を欠いている。よって、ナッシュとそれを踏襲した上岡の論はイエローストーンに適用するには漠然としすぎている。

一方、ラントはイエローストーン設立背景についてより具体的な議論を行っている。彼は初期国立公園設置の要件として、前述したモニュメンタリズムとともに経済的無価値性（economic worthlessness）を挙げている。

彼によると、公園推進派はイエローストーンの自然に正当性を求めるのではなく、むしろ、イエローストーンの無用性（uselessness）に力点を置いた。「耕作するには、標高が高すぎ、また、寒すぎる」と同時に「（国立公園への指定が、括弧内筆者、以下同）国民の資源に関する利益を損なうものではない[30]」。この「無価値性」は、以降の国立公園においても重要な点であった。ラントは「景観的ナショナリズムが資源主義と相反しない場所が国立公園として花開いた」と述べている[31]。実際にイエローストーン法をめぐる議論においても、カリフォルニア州選出の上院議員コール（Senator Cole of California）は以下のように投げかけている。「私は、この法案を通すことに大きな疑念を抱いている…ロッキー山脈には人が住み着かずに公園にできる土地がいくらでもある。（イエローストーンは）1 つの大きな公園であって、取り返しがつかない…きっと中には植民に適した耕作できる場所もあるだろう。そもそも、誰も植民しないような土地であれば、どうしてわざわざ公園を作る必要があるだろう。誰にも植民されないのであれば、この土地を植民から守ろうとする理由がまったく分からない[32]」。これに対して、イリノイ州のトランブル（Senator Trumbull of Illinois）は「（イエローストーンには）世界でもっとも素晴らしい間欠泉が存在し…この地域に植民を許せば、自然の驚異を見に来る人々に通行料を課す人々や障害物を建設する人々が生まれるだろう…私は、この法案は非常に適切なものであり、制定するには今がまさにその時だと考える。私たちは、過去にカリフォルニア州の巨木を譲渡し、ヨセミテ渓谷は保護区として成立したが、現在はこれに対する批判も生じている。このような批判が素晴らしい地域に生じるまえに、イエローストーンを公共の土地として保護するべきで

(29) 上岡、前掲書、47-48 頁。
(30) Nash, *Wilderness*, p.112.
(31) Runte, *op.cit.*, p.65.
(32) Ise, *op.cit.*, p.16. cf. Runte, *op.cit.*, p.51-53.

ある[33]」。

この議論でも明らかなように無価値性は初期の国立公園指定において重要であった。初期とは、自然保護思想が成熟しておらず、観光による利益も実証されていない時代のことである。コールの「そもそも無価値であれば、わざわざ公園に指定しなくてもいい」という言葉は正論に聞こえるが、これに対してトランブルは「通行料を課す人々」などを想定して反論している。引用の中でトランブルが指摘するヨセミテにおける批判とは、先住権（preemption）のことである。ハッチングス（J. M. Hutchings）とラモン（J. C. Lamon）の 2 名がヨセミテにおける土地所有問題を州及び連邦議会、最高裁判所で争っていたのだ[34]。また、ホームステッド法(Homestead Act) は投機目的などで悪用されることも多く[35]、トランブルはその点を指摘したと思われる。この議論から、1862 年のホームステッド法によって土地分配が加速する背景がイエローストーン成立を後押ししたとも考えられる。いずれにせよ、植民に適さず、鉱物資源も乏しい無価値な土地が初期国立公園設置の要件であったことは明白である。

最後にセラーズの論を検証したい。彼は脚注でラントの文化的ナショナリズムと無価値性の議論に言及するにとどまっている。本文においては、既述のキャンプファイアの物語を「ロマン溢れる想像（romantic imagery)」とした上で、ノーザン・パシフィック（Northern Pacific）鉄道による運動を論じている。セラーズによると同鉄道は 1870 年にダコタ地区からモンタナ地区に路線を拡大する計画をたて、「会社は、路線を西部に拡大すれば、その地域への旅行者の交通を独占できると考えた[36]」。事実、前述したランフォードによる講演活動もノーザン・パシフィック鉄道経営者、ジェイ・クック（Jay Cooke）の支援があった。セラーズは、クックの言葉を引用して「公園にすれば、土地要求者が住み着くことを防げるだろう。彼らよりは政府の方が取引しやすいから、法制定に向けて、出来るだけ早く何かしなければならない[37]」と述べている。この時代は、アメリカが積極的に公有地の開放政策を実施した時期であり、とりわけ鉄道建設への土地の無償払い下げは顕著であった[38]。

また、セラーズ同様に鉄道会社と国立公園の関連性を強く指摘した著書として、マルガリート・シャファー（Marguerite Shaffer）の *See America First* がある[39]。これは、アメリカにおいて、観光業がいかに国家アイデンティティーの創出に寄与したかについてまとめたものである。シャファーは、この作品の中でノーザン・パシフィック鉄道がイエローストーンへのアクセスを独占しようとしたことを述べたうえで、同鉄道が観光客を呼び込むためにイエローストーン

---

(33) Ise, *op.cit.*, p.17, cf. Runte, *op.cit.*, p.51-53.

(34) 伊藤太一「ヨセミテ国立公園における土地と所有と境界の変遷」『造園雑誌』Vol. 56-5、1993 年、73 頁。

(35) メアリー・ベス・ノートン他『アメリカの歴史③南北戦争から 20 世紀へ』本田創造監修 、三省堂、1996 年、195 頁 など多数の文献において指摘されている。

(36) *Sellars, op.cit.*, p.9. cf. 村串、前掲論文、117 頁。

(37) *Ibid.*, p.9

(38) ノートン他、前掲書、198-205 頁。 約 7 億 3000 万平方 km（1 億 8000 万エーカー）の土地を鉄道会社に無償で払い下げている。

(39)Shaffer, Marguerite S., *See America First: Tourism and National Identity, 1880-1940*, Smithsonian Institution Press, 2001.

を「ワンダーランド（Wonderland）」と表現してイエローストーンの理想化を図った点を指摘している。[40] ちなみに、1872 年時のイエローストーン入園者数は 300 人であったが、鉄道開通の 1883 年には年間入園者数が 5000 人に増加している。[41]

3　イエローストーン誕生要因の総括

2 章で述べたナッシュ、ラント、セラーズの議論をまとめると、イエローストーン国立公園誕生の背景として、①ナショナリズム（ヨーロッパに対する文化的コンプレックスの打破に有効でありラントの指摘するモニュメンタリズムに相当する）②無価値性③ノーザン・パシフィック鉄道による経済的背景、という 3 点が特色として挙げられる。ここで肝心なのは、イエローストーン設置においては第 1 の点であるナショナリズムが、ヨセミテ公園設置時ほど明確にはうかがえない点である。ラントはその理由を述べていないが、理由として以下の 3 点を挙げることができるだろう。

第 1 に、ヨセミテと異なり、探検隊や一部の山師などを除いては誰もイエローストーンを見たことがない点である。ヨセミテに対してイエローストーンはあまりに隔絶され、インディアンによる襲撃のある土地にあったため、文化人や新聞記者など見聞を広く流布する「巧みな口」に欠けていた。第 2 に、イエローストーンはヨセミテと異なり、ヨーロッパに比較できる自然環境がない点が挙げられる。イエローストーンは、広大な高原地帯であり、アルプスよりはヒマラヤに近く、ヨーロッパに比肩しうる場所がなかった。ヨセミテがヨーロッパの象徴であるアルプス型の自然を提示するのに対し重要な点である。第 3 に、急速な西進と南北戦争の終結により、この頃にはアメリカの脱ヨーロッパ化が急速に進んでいた点が挙げられる。フレデリック・ジャクソン・ターナー（Frederick Jackson Turner）が「アメリカ史におけるフロンティアの意義」[42] で指摘するように、東部はヨーロッパそのものであった。西進運動によって西部開拓が進み各地の自然地理条件に左右されながら「アメリカ性」が獲得される背景を鑑みると 1870 年代は、フロンティア開拓も進みアメリカ性が獲得されつつある時期であると考えられる。セオドア・ローズヴェルト（Theodore Roosevelt）も著書「西部の勝利」の中で「ウィルダネスの過酷な状況での生活は、ヨーロッパの記憶を完全に失わせた」と述べている。[43] また、南北戦争の終結と 1869 年に完成した大陸横断鉄道の存在は、精神的な「アメリカの完成」として指摘

(40) Shaffer, *op.cit.*, pp.44-52. 第 3 章 'The National Parks as National Assets', pp.93-129 も参照。 cf. Murphy, Thomas D., *Three Wonderlands of the American West,* The Page Company, 1912.

(41) *Yellowstone National Park's First 130 Years*, U.S.Department of the Interior, National Park Service <URL= http://windowsintowonderland.org/history/army&nps/page16.htm (2008/09/20)>

(42) フレデリック・ジャクソン・ターナー「アメリカ史におけるフロンティアの意義」『フレデリック・J・ターナー』（渡辺真治、西崎京子訳）研究社出版、1975 年。 フロンティア理論に対しては、数百篇にのぼる賛否両論がある（前掲書、17-22 頁）が、フロンティアがアメリカ性を確立する上で果たした役割について指摘することは可能であろう。

(43) Nash, *Wilderness*, p.149; cf. Roosevelt, Theodore, *The Winning of the West, The Works of Theodore Roosevelt* ,Vol.10 Memorial Edition, Cosimo Classics, 1924-26, pp.101-102.

できる。[44] 1864 年のヨセミテ前後ほどヨーロッパを意識する社会背景ではなかったと言えるだろう。

これら諸背景が、イエローストーンがヨセミテほど世論を喚起しなかった点である。その上で国立公園設置運動を牽引した 3 人の言葉を紹介すれば、ナショナリズムの価値は増す。ヘイデンの「優秀なアメリカ人はいつの日か、誇らかにこの地球上比肩しえない素晴らしい場所を地図で指し示すだろう」という言葉や、ドーンの「アイスランドの間欠泉はイエローストーンに比べると取るに足らないものである」という言葉、ランフォードの「ファイアホール盆地は、世界中のどんな場所よりも素晴らしい」という言葉である。[45] 設置運動を牽引した 3 人の言動は愛国心を強く示唆するものである。また、ニューヨーク・タイムズは「どうして山を見るためにスイスへ行き、間欠泉を見るためにアイスランドに行く必要があるだろうか？外国人にとって 30 年前のアメリカにはナイアガラの滝しかなかった。しかし、今やアメリカにはナイアガラの滝を見劣りさせるような新たな魅力があるのだ」と書いている。[46]

さらに、1872 年にアメリカを代表する画家であるトマス・モラン（Thomas Moran）の描いた「イエローストーンの大渓谷」（*Grand Canyon of the Yellowstone*）が議会によって 1 万ドルで購入されたこと、1874 年にはこの絵画が上院のロビーに掲げられたことが指摘できる。ナッシュは、「1874 年にモランの絵が上院ロビーに掲げられた瞬間こそ、アメリカの原生自然が国家のプライドとして裏書を得た瞬間である」と述べている。[47]

したがって、イエローストーン国立公園設置の際に無価値性の議論や利益団体によるロビー活動といった現実的な動きが存在したことは確かであるが、その概念の端緒としてナショナリズムが存在し、背景としてヨーロッパに対する文化的コンプレックスを強く含んでいたことは特筆すべきである。イエローストーン設置運動はその諸条件によってヨセミテほどナショナリズムを喚起はしなかったが、確かにナショナリズムを包含しており、長期的な視野で見るとアメリカがヨーロッパに対する文化的コンプレックスを打破し、アメリカ性なるものを獲得する過程において重要な意味を持ち合わせていると考えることができるのではないだろうか。

総括と展望

ラントを国立公園史家として有名にした *National Parks: The American Experience* の中で、彼はイエローストーン国立公園成立の背景として、文化的ナショナリズムと無価値性を論じた。文化的ナショナリズムに関してはヨセミテでもっとも顕著であり、イエローストーンでは説得力に欠ける面もあった。それは、イエローストーンがなぜヨセミテほどナショナリズムを喚起しな

(44) 南北戦争の終結はイギリスに依存していた南部の経済を北部に向けさせた。また鉄道の完成は国民経済拡大の基礎となり、アメリカ経済の構造を造りかえたとされる。ノートン他、前掲書、198-199 頁参照。

(45) ヘイデン、ドーン、ランフォードの言葉は、Runte, *op.cit.*, p.33, p.38。

(46) *Ibid.*, p.11.

(47) Nash, *Wilderness*, p.83. cf. Runte, *op.cit.*, p.39.

かったかについての説明が不足していたからである。本稿ではその説明をほどこし、もう一度諸背景を整理した上で、ナショナリズムの存在について論じた。

また、本稿では触れる程度にとどまったが国立公園誕生の背景としてロマン主義の影響による自然の評価があったことは明白である。それまで、一般的に「恐ろしいもの」、「畏怖すべきもの」、「不毛なもの」として考えられていた原生自然に美を投影し、精神的豊かさを感じるようになった自然観の転換の重要性は決して見落とされるものではない。しかし、なぜヨーロッパではなく、アメリカで国立公園が誕生したのか、という問いかけをすれば、ナショナリズムというモメンタムが欠かせないのである。なぜなら、国立公園に類する概念が先に誕生したのはイギリスであり、国立公園誕生要因として挙げられるロマン主義や鉄道が先に発達したのもイギリスを含むヨーロッパであったからだ。(48)

イエローストーン国立公園誕生後には、国立公園制度に積極的に取り組んだセオドア・ローズヴェルト大統領や世論を二分したヘッチ・ヘッチー（Hetch-Hetchy）論争(49)、国立公園局の設立や鉄道会社による広報などによって、加速度的に国立公園は周知され、体系化された。さらに、自動車の普及、ニュー・ディール期における市民保全部隊（Civilian Conservation Corps / CCC）などにより、それまでの上流階級のみならず、一般階級も国立公園を訪れる機会が増加した。戦後には、アメリカによって積極的な国立公園外交が行われた。例えば、世界国立公園会議の開催や世界遺産条約の提唱、各国への国立公園管理官派遣などが挙げられる。

これら国立公園史の端緒となるイエローストーンは世界最初の国立公園であるだけでなく、8890 平方 km という広大さ(50)ゆえに、自然保護概念の変化、多様化にも関わらず、現在に至るまでその確固たる地位を保持し続けている。イエローストーン研究者のジュディス・メイヤー（Judith Meyer）は、「“The” National Park といえば、イエローストーン公園のことを指す」と述べ、イエローストーンの特別性を指摘している。(51)

刻々と変化する自然観にも充分に対応できる大自然と広大さを持ち合わせたイエローストーンが最初の国立公園であったことは、アメリカが自信を持って国立公園を語ることのできる確固たる根拠となっていると指摘できる。アメリカが国立公園に国家アイデンティティーを投影するに至る最初の段階として、イエローストーン誕生におけるナショナリズムが指摘できるのではないだろうか。

---

(48) イギリスの代表的詩人、ウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）は 1810 年に湖水地方を「守り、楽しむ意思を持った人々によるある種の国有地（a sort of national property）」にすべきであると提言している。この言葉は、多くの文献において国立公園に類する概念を唱えた最初のものであると紹介される。
Wordsworth, William, *A Guide to the Lakes*, Oxford, 1810.

(49) ヨセミテ国立公園内にあるヘッチ・ヘッチー渓谷にダムを建設するか否かに関する論争。ダム反対派にジョン・ミューア（John Muir）、ダム推進派にギフォード・ピンショー（Gifford Pinchot）がいる。1913 年に、ダム推進派の勝利で終わるが、アメリカの世論を二分した大論争となった。

(50) 東京都の面積の約 4 倍にあたる。1970 年前後から生態系保全の考え方が自然保護において主流となっていくが、生態系保全は広大な保護地域を必要とする傾向がある。

(51) Meyer, Judith L., *The Spirit of Yellowstone*, Rowman & Littlefield, 1996, pp.5-6.